

## 南砺市文化芸術振興実施計画第4回策定委員会 議事録

日 時：令和3年3月3日（水）15時～16時30分

会 場：南砺市役所 福光庁舎本館 302会議室

出席者：古池委員長、安嶋委員、川合委員、舟岡委員、片岸委員、高坂委員、野村委員、  
村上委員、向井委員、前川委員、川田委員  
（事務局）長岡課長、山本係長、米、上水

欠席者：松本副委員長、水落委員、此尾委員

### 1. 開会

### 2. 委員長あいさつ

委員長：いよいよ基本計画（第2期）の改定事業、第2次実施計画の策定事業が大詰めを迎えた。これまで策定委員の皆様、そして推進ワーキンググループの皆様には大変熱心な議論をしていただき、ここまで来ることが出来た。誠にありがとうございます。本日は計画内容を皆様に最終確認していただき、その後市長に報告するという流れである。どうぞよろしくお願いいたします。

### 3. 議事

#### （1）「南砺市文化芸術振興基本計画（第2期）」の確認について

（資料1について、事務局より説明）

委員長：前回の策定委員会でもいただいた指摘に対して、原稿の修正を行った。特に“民藝”に関する議題など、議論しつくせないような重い議題もあったが、時間的制約と行政計画という制約の中で、推進ワーキンググループにおいて議論していただいた。また、パブリックコメントについては、ご指摘の通り一見すると創造的な文化に関する記載が手薄という印象を受けるが、「地に足をつけた文化を構築することが、ひいては創造的な文化を呼び込み新たなものを生み出す」ということに軸足を置くことで、創造性を発揮出来ると考えている。パブリックコメント及び前回の策定委員会でものご指摘等の内容を反映して作成したのが、今回の基本計画最終原稿である。特にご意見がないようであれば、この内容にて本計画をご承認いただいてもよろしいか。

一 同：承認する。

## (2)「第2次南砺市文化芸術振興実施計画」の確認について

(資料2について、事務局より説明)

委員長：基本計画と同様、パブリックコメント及び前回の策定委員会での指摘等の内容を反映して作成したのが、今回の実施計画最終原稿である。特にご意見がないようであれば、この内容にて本計画をご承認いただいてもよろしいか。

一 同：承認する。

委員長：議事(1)(2)において両計画を既にご承認いただいたので、**議事(3)「南砺市文化芸術振興基本計画(第2期)」及び「第2次南砺市文化芸術振興実施計画」の承認**は省略させていただく。

行政計画、とりわけ南砺市のような文化資源の蓄積が分厚い土地においては、すべての意見を反映させるということは難しいが、様々な制約もある中では納得できる内容の計画が完成したと思う。ここからは、両計画についてご承認いただいたという前提の上で、今後の取り組み方に対するご助言、皆様のご意見やご感想等うかがいたい。

委員：精神文化についての話があったが、文化には“目に見えるもの”と“目に見えないもの”がある。例えば“民藝”などの目に見えない文化は、時代とともにだんだん疎かになってきている。心や精神的な部分には、浄土真宗云々というよりも、自然環境や稲作、農村など“周りに元々あったもの”が背景にある。柳宗悦をはじめとした人々が何故南砺に集まったのか、南砺の何に惹かれてやって来たのかということは、次の段階で議論されることと思う。市民に分かりやすく説明し、心に落ちていくような機会、語り合いの機会があればさらに深まっていくと思う。

委員：文化芸術というものは難しい。これまで自分は“目に見える文化芸術”しか意識していなかったので、目に見えない精神的なものが今回の基本計画や実施計画にどのように帰するのか、今後どのように進めていけるのかということは大変興味深く、期待もしている。この会議に参加して、初めて南砺市の文化芸術に触れられたように感じており、良い機会になったと思う。

委員：まずは、策定委員会及び推進ワーキンググループの皆様に御礼申し上げたい。教育部長という立場から特に、「郷土に関心を持つ子どもたちの育成」という項目において、現状をとらえ丁寧に議論をしていただいたと思う。教育委員会としてもそれを踏まえて、子どもたちの郷土愛の醸成に取り組んでいきたいと思う。南砺市では、小中一貫の9年間の教育の中で「ふるさと学習」を内容が重複することのないよう積み上げていき、より効果的な学習を目指している。自分の地域に愛着がなければ、地元で活躍することも、地域を良くすることも出来ない。今回の計画を基にして、家庭や学校などの日常の中で、自然に文化芸術を体験できる機会を増やしていけるよう、努力していきたいと思う。

- 委員：ジャンルや地域を越えて交流を持ち、ネットワークを結び、そこからまた新しいものを生み出すという流れがうまくいけば、伝統文化が沢山ある南砺市では強みになるだろう。自分はヘリオスの職員なので、計画の中に文化施設に関する記載があるのは喜ばしい。計画を推進するにあたり、ヘリオスをはじめとした文化施設を活用してもらい、施設側としてもそれをサポートしていきたい。
- 委員：先ほども言われたように、“目に見えないもの”は大事。“民藝”は目に見えないもの、南砺の風土、生活そのものだと捉えることも出来るので、今後改めて丁寧に調査してほしい。また、2023年は棟方志功の生誕120周年にあたる。石井頼子氏（棟方志功研究家・棟方の孫）の史料を基にして、次につなげて広げていってほしい。
- 委員：2点聞きたいことがある。1点目は、両計画に基づいて市民の皆様が実際にどのように実践していくのか、具体的にどのように動いていくのか。各地域の文化協会など、末端で文化芸術を支えてくれている人々に計画を提示し、両計画に基づいて文化芸術活動を行うことが出来るのか。2点目は、実施計画のP3に（4）計画の達成度を示す指標の設定という項目があるが、具体的なKPIや数値について、誰が、どのように選定し、具体的にどのような対応をしていくのか。この内容からは読み取りにくい。
- 委員：自分は福岡（高岡）で“菅笠作り”の後継者育成事業に参加している。福岡でも菅笠作りの後継者不足に悩んでおり、計画に基づいて育成事業を行っているが、なかなか思うように進んでいないというのが現状。南砺市と同じように計画を作成し、実施体制や評価体制、目標等も設定し、やるべきことはやっているが、率先して動く人がいないと前に進んでいかない。育成者や参加者、職員等も頑張っているが、「何が何でも継承しなくては」という気迫のある人がいないとうまくいかない。今回策定した計画も文面上は立派だが、実際に現場を見ながら進んでいかないと、現状を維持するのが精一杯で前に進んでいかない。南砺市にはそれをできる人材がいると思うのでそういった人材を発掘する。そして、どのように計画を浸透させ、人々の機運を高めていくか、これからまた議論をしながら進めてほしい。
- 委員長：計画を作ることがゴールではなく、ここからがスタート。両計画を市民の皆様とともに分かちあいながら進めていくということが大切。それをしっかり見守ることが自分の役割だと思う。先ほど言われた“目に見えないもの”は見えないが故に、気が付いた時には既に消滅しているということがある。他に類を見ないような南砺市の文化の蓄積を支えているものは、言語化しづらいが、これまで培ってきた精神風土なるものが担ってきた役割というのは大きいと思う。それが暮らしや生業、景観、風景など様々なところに現れてくる。いかに絶やさず次につなげていくかというのが難しい課題。行政計画という性質上、思うように文章化も出来ない中で、最大限の書き方が出来たと思う。計画に書ききれなかった部分は、

実践していく中で形にしていきたい。

事務局：先ほどのご指摘について回答させていただく。1点目、末端で文化芸術を支えている方々に対してどのように両計画を浸透させていくかについて。実施計画の中には団体間の交流、異業種のコラボレーション、文化協会をはじめとした各種文化団体のアンケート調査等の事業が記載されており、そこからネットワーク作りにつなげていきたいと考えている。そういう事業を進めていく中で、少しずつ色々な団体の方々に仲間に入っていただき、一緒に計画を推進していきたい。2点目、指標について。実施計画の P29 において、P3 で説明した指標の具体的な内容を記載している。

#### 4. 市長への計画完成報告

(委員長から市長へ、計画冊子の手渡し)

委員長：今回練り上げた計画は、策定委員会と推進ワーキンググループの皆様、つまりは南砺市民の皆様のお力添えの賜物である。「言葉で説明できる部分は氷山の一角で、その下には暗黙知（言葉で説明できない部分）が深く広がっている」という考え方があがるが、南砺市はまさにこの暗黙知を積み上げてきたところだと思う。土徳などの精神風土が凝縮している中、計画として明文化するのは非常に難儀だった。計画として形になっているものはごく一部で、その奥には言葉に出来ないものが沢山積み上がっている。基本計画は「結」という言葉がテーマ。長い歴史の中で力を合わせてきたが、その伝統的な力である「結」を南砺市の象徴としている。ベースとなる分厚い伝統文化の力に、新しく創造的な文化が引き寄せられている。この「伝統と前衛がせめぎ合う中でエネルギーが出てくる」という類まれな地が南砺市である。伝統と前衛がぶつかり、それが時を経て新たな伝統となる。その繰り返しこそが南砺市の力強さを生み続ける所以だろう。このサイクルを今後も続けていくためには、伝統的な「結」が今後も存在し続けるかというのが鍵となる。しかし時代に応じて形を作り変えることも必要なので、敢えて「結ぶ力（ネットワーク）」と呼び変えている。「今まであったものが今後もあるとは限らない。時代に応じて作り変えていく」という部分をより強化したというのが、今回の改定のポイントの一つである。また、伝統と前衛のぶつかり合いは、どちらか一方に力が偏るとうまくいかない。伝統がしっかりあってこそ、新しいものも創造されていく。これから“伝統”を“新たに”作っていくという思いを込めている。少子高齢化という時代の流れ、コロナ禍による語り合う場の制限など、逆風が吹いている中で、結ぶ力（ネットワーク）をどのように作り変えていくかという部分が重要となる。これからも南砺市には、全国に類を見ない地として輝き続けていってほしい。

委員：第1部会は基本目標1と3を担当し、後継者の育成や文化芸術の共通理解という部分を中心に議論を行った。様々な年齢・所属の方が集まった部会だったため、活発な意見交換や新たな発見があった。文化芸術の再評価を進めるためには情報発信が非常に有効であり、第1期に完成した「文化芸術アーカイブズ HP」は多くの方に閲覧いただいていると聞いた。しかし部会の中では、「HPの認知度は低く、更なる周知が必要」「使い勝手が悪い」という意見もあった。より多くの人に認知してもらい、活用してもらおうというのが今後の課題である。南砺市の文化芸術に興味がある人にとってはより知識を深め、全く知らない人にとっては新たな発見となるような情報発信が出来れば、文化芸術の再評価・再認識へとつながっていくと思う。また、人材発掘・育成においては、子どもたちに南砺の文化や伝統をどのように知ってもらうか、触れてもらうかというのが大事である。“これまでの当たり前”が当たり前ではなくなった状況下において何が出来るのかということ、今後実施計画を推進する中で考えていく必要がある。子どもたちに届けることは、その親や周囲の人々にも届けることにつながる。新たな人材発掘や情報発信によって、文化芸術が更に高まっていくことを期待している。自分自身も興味がある分野なので、今後も計画に関わっていき、文化芸術の発展につながる取組みが出来ればと思う。

委員：第2部会は基本目標2と4を担当し、既存の文化芸術団体の相互交流や新たなネットワークの構築という部分を中心に議論を行った。第1期に実施した事業を今後どのように深めていくか、どうすればより現実的に取り組んでいけるかという部分を集中的に議論した。第1期の成功体験である意見交換や団体交流をふまえて、より野心的な事業を行うために、ジャンルを超えた各種団体の交流を深めていきたいと考えている。本計画での事業はあくまで土地(=文化の土壌)を耕すだけで、既に存在する種(=南砺の文化)を土壌に蒔いて、化学変化を起こしながら成長させていき、実らせるのは各文化芸術団体であるという認識である。それをサポートできる事業を行っていきたい。そして次の段階として、市外に向けて発信し、共感してもらえるような事業にしていきたいというのが、我々の思いである。

委員：第3部会は基本目標5を担当し、文化芸術による地域活性化という部分を中心に議論を行った。まずは第3部会のメンバーを紹介したい。商工会青年部に所属して様々な活動を行い、福野地域をけん引しておられる方。文化施設の職員として地域の文化芸術団体と直接触れ合い、悩みを共有しておられる方。南砺市へと移住され、五箇山和紙職人かつ芸術家として活躍されている方。市外在住だが、豊富な経験と客観的視点により計画全体を俯瞰して見ていただける方。それぞれの立場から、日頃の活動の中で抱えている課題や危機感に基づいて議論を行うことが出来た。特に印象的だったのが、なぜ南砺市に移住するに至ったのか、移住するにあたりどのような人と出会い、どのようなサポートを受けたのか、という話。

これから移住・定住のための提案を行う上で、とても参考になると感じた。文化芸術の現場ではそれぞれ危機感を持って活動されており、悩みも多種多様であるが、最大公約数となるような良い塩梅で計画をまとめることができたと思う。

委員：これまで他の自治体でもまちづくり活動に参加してきたが、南砺市は文化資源の宝庫だと感じている。多様な資源があるが故に、継承や新たな創造を行う上で道しるべとなるような計画が必要だと改めて感じた。今回策定した両計画は分かりやすい内容になっていると思う。昨今、新型コロナやオリンピックの延期など、文化芸術を取り巻く環境は変化が激しい。前回計画策定時は「文化芸術創造都市」を中心に議論を行っていたが、最近ではSDGsをふまえての議論が必要となっている。また、井波が日本遺産に認定され、つい先日「茅採取」がユネスコ無形文化遺産に登録された。このように文化芸術に関する環境が著しく変化する中で、計画という道しるべは大切なものだと思う。だからこそ、計画をどのように推進していくかというのは重要な課題で、「どのような体制で計画を実行していくのか」「どのように計画を地域に浸透させるのか」ということを、推進ワーキンググループの各部会長を中心に考えていただき、今後も協力いただけるというお言葉もいただいた。計画策定を通して南砺の魅力が分かったので、自分も引き続き計画の推進に関わっていきたい。

市長：策定委員会及び推進ワーキンググループの皆様におかれましては、基本計画の改定事業及び実施計画の策定事業にご協力いただき、ありがとうございます。南砺市は小さな地方都市でありながら、景色や豊かな自然、文化芸術など世界に誇れるものが沢山ある。世界遺産やユネスコ無形文化遺産、日本遺産など、世界に発信できるものがあるということを、市民の皆様にも地域の誇りとしてご理解いただきたい。他の自治体にはないことである。また、最近では若い世代の著名なデザイナーたちの中で“民藝”を見直す動きがあるということに感動している。先日も民藝についてのオンライン講演会を聴講したところである。これからの日本のデザインのあり方について民藝を通じた議論を行い、長くきちんと使われるものが素晴らしいという「ロングライフデザイン」という考え方について述べられた。南砺市には元々文化芸術の力、地域力というものがあり、そして市民全体が様々な文化芸術に携わる民度の高い地域だったからこそ、それを土壌として民藝が磨かれていったのだろう。令和3年度にはそういう足元のことを調査して、市民の皆様にご理解いただくための事業も予定している。

最近、利賀に新たに出来たレストランが、日本中から注目されている。器や景色、置物など、そこにはまさに富山県全体の芸術が集結しており、型にはまらない新たな料理が提供されることに訪れた人は感動する。それを見て、食も文化だと思う。メイン料理には野生動物の肉や地元で育てられた野菜を使用しており、前衛的な調理法を用いている。最高峰のフレンチシェフによる創作料理のベースが地元の人々の漬物や報恩講料理だと聞いて、南砺市らしい料理だと感じた。住民の力

が文化芸術の大きな原動力となり、またそこで人を育てる。それこそが南砺市だ  
と思う。担い手が減る中で文化を継承するためにどうすべきかというのは大きな  
課題だが、情報発信やネットワークの構築、ジャンルを越えた文化芸術の交流と  
いうこともこれから重要になる。そういう意味でも、食文化や彫刻、ゲストハウ  
ス、ワーケーションなど、様々な分野を含めて、計画へと取り組んでいきたい。  
昨年はコロナ禍により多くの祭りが中止となり、今年もどうなるか心配している。  
先日、ある祭りの実施団体と「何とかして一步踏み出さないと、2年連続で中止  
となれば今後もっと大変なことになる」という思いを共有した。今年最小限の内  
容でも良いので実施すれば、次の年はプラスになるだろう。本日完成した両計画  
について市民の皆様とともに今後取り組んでいき、南砺市が文化芸術で活性化す  
ることを目指す。子育てや教育など、様々な分野で文化芸術の要素を取り入れな  
がら、仕事に活かしていく必要がある。今後も皆様のお力添えやご助言を賜りた  
い。本日はありがとうございました。

## 5. 閉会